

5月12日「命のパン」出エジプト16：4～16、ヨハネ福音書6：34～40

イエス様は、ガリラヤ湖のほとりでたった5つのパンと2匹の魚を5000人以上もの人達と分け合いました。人々はそのことに感動し、熱狂して、自分たちをローマ帝国から解放してくれる「王」として担ぎ上げようとなりました。そこでイエス様は群衆を離れ、向こう岸にまで渡ることになりました・・・ところが、群衆は小舟を使って向こう岸にまでイエス様を追いかけてきたのです。そして、もっとたくさんのパンと、もっと凄い奇跡を要求したのです。そこで、イエス様は人々に言われました。「朽ちる食べ物ではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。(6：27)」永遠の命に至る食べ物とは何のことでしょうか？先ほど歌った讚美歌56番「主よ、いのちのパンをさき、あたえたまえわれらに。主のいのちのみことば。」そうです！それは私たちが毎週受けているイエス様のみ言葉のことです。そしてそれを語られたイエス様を信じることです。けれども群衆には何のことか分かりません。群衆にとっていのちの食べ物と言えば、(今日もう一箇所読んだ)出エジプト記に書かれているマナのことです。エジプトで奴隷となっていたイスラエルの民が、モーセに導かれてエジプトを脱出して荒れ野をさまよいます。人々はせっかくエジプトから脱出することができたのに、食べ物や飲み物がない不自由な放浪生活に嫌気が差して、モーセを(引いてはモーセを遣わした神さまを)批判し始めます。そこで神さまが天から降らせたのがマナです。ウエハースのような甘いパンで、イスラエルの民はこのマナと呼ばれる不思議なパンとうずらによって神さまに養われたのです。群衆はイエス様にモーセと同じように、いやそれ以上に自分たちを毎日の食事に事欠かないようにしてくれることを求めました。

そこでイエス様が群衆に言われたのが今日の言葉でした。「35節 わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」先ほども言いましたが、これはみ言葉のことです。いのちのパンとは言うならば私たちの心(魂)を生かす霊的な糧のことです。けれども、物質的なパンを求め、空腹が満たされることを望む群衆の期待した物とは違っていています。期待通りに動いてくれないので、人々の間にはだんだんイエス様への不信が広がっていきます。さらに畳み掛けるようにイエス様は語られました。「51節 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」これには多くの人が躓きました。「自分の肉を食べさせる！？なんて恐ろしいことを言うんだ！？」そう勘違いしたのです。もちろん、私たちはこれは聖餐式のことを言っていると分かります。けれども、例えばローマ帝国では聖餐の様子からキリスト教は人の肉を食べる恐ろしい宗教だと

勘違いされ、迫害を受けました。この躓きは大きく、弟子たちの中からさえ、イエス様の元を去る者たちが現われたのです。

今日の物語でイエス様はご自身を「命のパン」だと言われます。それは、霊的な糧であり、いわゆる物質的で食欲を満たすものではありません。そして、それは空腹を何とかして欲しいと集まった群衆を拒否するような形で語られました。20年位前の説教集を読むと、戦後すぐの貧しい時代、人々は貧しかったが心は豊かだった。今は豊かになって食べ物に困らなくなったが、心は貧しくなった。だから私たちは物質的な糧だけでなく霊的な糧を求めましょう・・・云々と続いていました。20年前なら私も同じように語ったかもしれません。ところが今の私たちはそうも言えない状況であると思います。

私のとても仲良くしている友人の一人に香港から来た女性の宣教師がいます。彼女は今は私の前任地神戸聖愛教会で働いています。なかなかバイタリティーのある人で、その神戸の教会でちょうど1年前に「子ども食堂」を始めました。「どうして海外から来た宣教師が子ども食堂を！？」そう思われるかもしれません。それは彼女が日本に来た最初の年に読んだあるニュースに非常に大きなショックを受けたからだと言うのです。2013年、大阪市北区天満のマンションの一室で母子と見られる二人の遺体が見つかりました。室内には食べ物はなく、残金は数十円。28歳の母親が3歳の息子に残したとみられるメモにはこう書かれていたそうです。「最後におなかいっぱいいたべさせられなくてごめんね」

日本のような裕福な国で餓死する親子が居るなんて！？このことにショックを受けた彼女は日本で、子どもたちの貧困のための働きをすることを決意したと言うのです。

私の義理の母は養護教諭として公立中学校の保健室で働いているのですが、GW10連休の前にこんな風に話していました。「10連休の間、給食無しで生き抜けるか心配な子が大勢いる」悩みを抱えて保健室にやってくる子どもたちの中には家でまともな食事を摂れない子がかなり居るとのことでした。

現在、私たちの国の7人に1人、一人親の世帯では2人に1人の子どもたちが貧困状態にあると言います（厚生省）。これは先進国の中で最悪の水準と言われています。こんなに物が溢れ、豊かに見える国のなかで喰うに喰えない子どもたちが現実にたくさんいるのです。一方で日本は世界で最も食品廃棄量の多い国でもあります。年間で646万トン（農水省）、これは国連の食糧援助の2倍にもあたります。このギャップが示していることは本当に深刻です。食料が足りないではありません！食料は十分にあるので

す。問題はそれを分け合うことができない私たちの社会にあるのです。

実際、神さまは肉の糧を惜しみなく与える方です。荒れ野を放浪するイスラエルの民のためにはマナを降らせ、うずらの肉を与えます。この地上は神さまの祝福を受けており、現在生きる人類すべてを養うのに十分な食料を与えてくれています。神の恵みは私たちには十分なのです。先日「世界の軍事費 1 年分のできる」という試算を見つけました。世界の軍事費は年間 8000 億ドル、それを使えば①飢餓の 8 億人の 1 年分の食糧費、②難民 2000 万人にテントと毛布、③全人類に基礎教育、④全人類に安全な水と下水道、⑤全世界の女性に出産保健衛生・・・⑦全世界の砂漠化防止、⑧全世界の兵器を廃棄、⑨全世界の地雷を撤去 etc と続きます。たった 1 年間すべての国が戦争を放棄すれば、今地球上で起こっているほとんどすべての問題、貧困、難民、教育、環境破壊、は解決できると言うのです！私たちが互いに争い合うことさえ放棄すれば、ほとんどの問題は解決可能なのです！けれども、それが出来ない。なぜか？私たちの精神的な貧しさがその道を妨げているのではないのでしょうか・・・

私たちは物質的な貧困と霊的な貧困を切り離して考えがちです。けれども実はこれらは密接なのではないのでしょうか？群衆は、イエス様がパンを増やされたのを見て「更に欲しい」とイエスさまに迫ります。だれも自分たちで分け合おうとは言いません。そこにこそ精神的な貧しさを見ます。イエス様はたしかにパンを人々にパンを与えます。そのパンはもともとどんなパンだったのか？たった一人の子どもがみんなのために、と差し出したパンだったのです。弟子たちが「この大人数（5000 人）の前では何の役にも立ちません」と言って切り捨てたパンだったのです。イエスは単にパンを増やしたのではありません。どんなに小さなものでも分かち合えば豊かになります。互いに愛し合う道を示されたのです。けれども、群衆はそのメッセージを受け取りきれませんでした。人間は弱く罪深いのです。けれども、イエス様は私たちを罪から解放し、愛の道へと招いてくれました、この互いに愛し合うというメッセージが私たちを本当に生かす命のパンです。そしてこのキリストを信じること、このキリストに倣うこと、このキリストに従うこと、これが永遠の命に至る道なのです。死を越えてなお生き続ける愛に私たちが身を委ねることなのです。互いに生かし合う道へと進むということなのです。

最後に、このいのちのパンを最初の教会がどう受け取ったかをお話ししておきます。教会での食事をよく「愛餐会」と呼びます。「愛餐」・・・教会でしか言われぬ言葉ですね。これはもともと単なるお食事会を指す言葉ではありません。イエスの示された隣

人愛の実践として特に貧しい人々を招いて催される食事のことを指すのです。最初の教会の集いには礼拝と食事はセットでした。皆でお弁当を持ち寄って分け合ったのです。それはもちろん、今日のテーマであるようにキリストが私たちにパンを分かち合うことを教えられたからです。その食事が教会が組織化され、制度化されていく中で、儀式としての聖餐と、交流としての愛餐に分けられていきます。残念なことに愛餐は初期の頃から宴会騒ぎと混同されがちでした。聖餐式の時に「しゅのからだをわきまえないで飲み食いするものは、その飲み食いによって自分にさばきをまねく」とのパウロの言葉を聴きますが、それはこの愛餐（聖餐）の席で裕福な者が貧しい者たちをほったらかしで自分たちだけで教会に集まり、宴会を開いてどんちゃん騒ぎをしていることへの戒めなのです。そんなことがあって、4世紀ごろになると愛餐は教会内で禁止され、7世紀にはより効果的な貧しい人たちへの救済の方法にとってかわられ、教会の中からは一旦姿を消すことになるのです。

今、「子ども食堂」が社会の中でかなり注目を集めています。取り組んでいる教会も多いようです。私もこの働きはかなり教會的だと思います。愛餐とはもともとそうやって食事を通して私たちの内に注がれている神様の愛を確かめ合い、互いに支え合いながら歩む道だったのです。愛の食事が必要なのはもはや子どもだけではありません。高齢者だって、若い世代にだって必要としている人は大勢いるはずです。教会の中にこの愛の食事をもう一度取り戻したいと私は真剣に願っています！

最後に、聖餐式に読まれる言葉を皆さんと分かち合いと思います。「聖餐」をあらゆる「食事」のこととして受け止めてみましょう。私たちの歩むべき道が示されるように思います。

測ることのできない愛と恵みとを私たちの心に刻み付けるために主は食事を与えてくださいました。「ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者はしゅのからだと血とを犯すのである」また「主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招く」と勧められています。かえりみて、おのおの罪を深く悔い改めなければなりません。このようにして信仰と真実とをもってイエス様から与えられた日々の食事にあずかりましょう！